

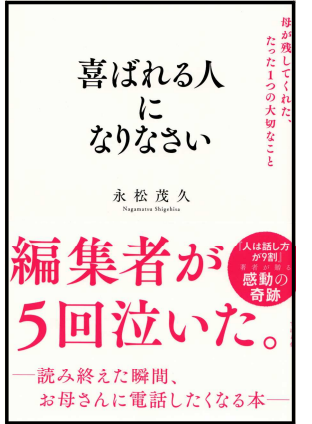


ひらほく新聞

発行所 読売センター平塚北部(ひらほく) 山本 直 〒254-0013 神奈川県平塚市田村9-4-32 電話 0463-54-2807

「ひらほく新聞」で検索!
★感謝で継続12年目に突入★
<http://www.hirahoku.com/>
☆ぜひ、バックナンバーをどうぞ!

今あなたに 大切な人は 笑っていますか



今月は両面、永松大特集!

当「ミニコミ」も、2010年7月創刊以来、月一回の発行で今年より12年目に突入です。毎月待っていたらだいたい(と信じている)笑(笑)皆さまのおかげと、感謝の気持ちでいっぱいです。引き続きご愛顧のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

今月号では、2020年ビジネス入書年間ランキング一位を獲得、2021年も特別賞を受賞の『人は話し方が9割』の著者、永松茂久さんの最新刊、『喜ばれる人になりなさい』を(縁有難く)紹介します。2016年5月、享年65歳で亡くなった、母たつみさんが残してくれた、たった一つの大切なこととは…。

運は買えるの？

「茂久、知っている？運って買えるのよ」

僕の母、永松たつみはこうした一見おかしなことを、大真面目に言うタイプだった。

「あのね、この世には目に見えないお金があるの。そのお金はね、徳っていうのよ」

「その徳はね、喜ばれることをしたら1個たまると。そしてね、人に気づかれないように喜ばれることをしたら、さらにボーナスがついて10倍たまるとよ」

「そしてね、親の積んだ徳は子どもに流れるの。だから私は喜ばれることをたくさんして、あなたたちに徳を流すからね」

「あなたたちのために徳を積む」これが母の口癖だった。

母は、お坊さんの資格を取って、悩める人たちに向けてカウンセリングをやっていた。

「あのね、最近思うんだけど、『こんなごときもほめなさい』っていう理論があるけど、私はそれはどうなんだろうと思うのよ。家ではそれで通用するかもしれない。でもね、私は子どもはいつか社会に返す存在だと思ってるのよ」

子どもはいつか社会に返す存在

母は、お坊さんの資格を取って、悩める人たちに向けてカウンセリングをやっていた。

「あのね、最近思うんだけど、『こんなごときもほめなさい』っていう理論があるけど、私はそれはどうなんだろうと思うのよ。家ではそれで通用するかもしれない。でもね、私は子どもはいつか社会に返す存在だと思ってるのよ」

社会に返す。確かに僕と弟はそう言われて育った。「なんて冷たい母親なんだ」と思ってたこともある。そういう意味では「自分の子だから」と甘やかされた記憶はあまりない。

・お世話になった人にちゃんとお礼は言ったか？
・筋道は通しているか？

「恩を忘れてはいないか？自分の我ばかりを通そうとしていないか？」

子どもの頃はうとうしかなかったが、そのうとうしい教えが社会に出て驚くほど役に立った。母は最初から僕たちを本気で「社会に返す」つもりだったのだと思う。

「お母さんはそもそももうさくて当たり前。子育てに悩んで、そのうえ、ほめられない自分にまた悩んで母親自身が自己肯定感を失ってしまったら、結局一番かわいそうなのは子どもだよ。それより他にやることがあるでしょ」

「お母さんはそもそももうさくて当たり前。子育てに悩んで、そのうえ、ほめられない自分にまた悩んで母親自身が自己肯定感を失ってしまったら、結局一番かわいそうなのは子どもだよ。それより他にやることがあるでしょ」

その母としてやるべき、大切な3つのこととは…

①子どもに対する心配をする時間があってもいい。それを自分の好きなことをやる時間に変えること。その姿を子どもに見せれば、子どもは将来そうやって楽しく生きることが出来る人間になるって信じてるから

②子どもがどんな状態であっても、お母さん自身が自分の機嫌は自分で取りながら明るく生きること

③何があっても子どもの味方でい続けること。何があっても子どもの未来を信じてること

息子が言うのもなんだが、母の言葉に矛盾はなかった。厳しい時は家出したくなる

「あなたの本を書いているうちに役割を勘違いしている」

出版を控え、母の病室で原稿に向き合っている僕に母はいつも以上に感情的になつて言った。

「社長とか著者とか有名人とか、そういう人って地位とか勲章とか影響力とかを持ってるとよ。今のあなたは全部それを持ってるとよ。全部白紙に戻した。それからは病気に関わらず、僕と2人で楽しく原稿チェックを手伝ってくれた。」

「あなたの本を書き始めた最初の頃、『自分の経験を通して、悩んでいる人の心を少しでも明るくしたい』って言ってたよ。あの頃

「あなたの本を書き始めた最初の頃、『自分の経験を通して、悩んでいる人の心を少しでも明るくしたい』って言ってたよ。あの頃

「あなたの本を書き始めた最初の頃、『自分の経験を通して、悩んでいる人の心を少しでも明るくしたい』って言ってたよ。あの頃

相手の気持ちを考えるというって

「優しいとは人に親切にすること。でももっとその前に、弱い立場にいる人の痛みを知ること」

理不尽な部分もある母ではあったが、幼い頃に折に触れて言われたこうした言葉の中に、今大切なことがたくさんある気がしてならない。

母が教えてくれた一番大切なこと

「あなたの本を書いているうちに役割を勘違いしている」

出版を控え、母の病室で原稿に向き合っている僕に母はいつも以上に感情的になつて言った。

「社長とか著者とか有名人とか、そういう人って地位とか勲章とか影響力とかを持ってるとよ。今のあなたは全部それを持ってるとよ。全部白紙に戻した。それからは病気に関わらず、僕と2人で楽しく原稿チェックを手伝ってくれた。」

「あなたの本を書き始めた最初の頃、『自分の経験を通して、悩んでいる人の心を少しでも明るくしたい』って言ってたよ。あの頃

「あなたの本を書き始めた最初の頃、『自分の経験を通して、悩んでいる人の心を少しでも明るくしたい』って言ってたよ。あの頃

「あなたの本を書き始めた最初の頃、『自分の経験を通して、悩んでいる人の心を少しでも明るくしたい』って言ってたよ。あの頃

「あなたの本を書き始めた最初の頃、『自分の経験を通して、悩んでいる人の心を少しでも明るくしたい』って言ってたよ。あの頃

「あなたの本を書き始めた最初の頃、『自分の経験を通して、悩んでいる人の心を少しでも明るくしたい』って言ってたよ。あの頃

「あなたの本を書き始めた最初の頃、『自分の経験を通して、悩んでいる人の心を少しでも明るくしたい』って言ってたよ。あの頃

「あなたの本を書き始めた最初の頃、『自分の経験を通して、悩んでいる人の心を少しでも明るくしたい』って言ってたよ。あの頃

「あなたの本を書き始めた最初の頃、『自分の経験を通して、悩んでいる人の心を少しでも明るくしたい』って言ってたよ。あの頃

「あなたの本を書き始めた最初の頃、『自分の経験を通して、悩んでいる人の心を少しでも明るくしたい』って言ってたよ。あの頃

「あなたの本を書き始めた最初の頃、『自分の経験を通して、悩んでいる人の心を少しでも明るくしたい』って言ってたよ。あの頃

「あなたの本を書き始めた最初の頃、『自分の経験を通して、悩んでいる人の心を少しでも明るくしたい』って言ってたよ。あの頃

「あなたの本を書き始めた最初の頃、『自分の経験を通して、悩んでいる人の心を少しでも明るくしたい』って言ってたよ。あの頃

「あなたの本を書き始めた最初の頃、『自分の経験を通して、悩んでいる人の心を少しでも明るくしたい』って言ってたよ。あの頃

「あなたの本を書き始めた最初の頃、『自分の経験を通して、悩んでいる人の心を少しでも明るくしたい』って言ってたよ。あの頃

「あなたの本を書き始めた最初の頃、『自分の経験を通して、悩んでいる人の心を少しでも明るくしたい』って言ってたよ。あの頃

「あなたの本を書き始めた最初の頃、『自分の経験を通して、悩んでいる人の心を少しでも明るくしたい』って言ってたよ。あの頃

「あなたの本を書き始めた最初の頃、『自分の経験を通して、悩んでいる人の心を少しでも明るくしたい』って言ってたよ。あの頃

「あなたの本を書き始めた最初の頃、『自分の経験を通して、悩んでいる人の心を少しでも明るくしたい』って言ってたよ。あの頃

「あなたの本を書き始めた最初の頃、『自分の経験を通して、悩んでいる人の心を少しでも明るくしたい』って言ってたよ。あの頃

「あなたの本を書き始めた最初の頃、『自分の経験を通して、悩んでいる人の心を少しでも明るくしたい』って言ってたよ。あの頃

「あなたの本を書き始めた最初の頃、『自分の経験を通して、悩んでいる人の心を少しでも明るくしたい』って言ってたよ。あの頃

「あなたの本を書き始めた最初の頃、『自分の経験を通して、悩んでいる人の心を少しでも明るくしたい』って言ってたよ。あの頃

「あなたの本を書き始めた最初の頃、『自分の経験を通して、悩んでいる人の心を少しでも明るくしたい』って言ってたよ。あの頃

「あなたの本を書き始めた最初の頃、『自分の経験を通して、悩んでいる人の心を少しでも明るくしたい』って言ってたよ。あの頃

「あなたの本を書き始めた最初の頃、『自分の経験を通して、悩んでいる人の心を少しでも明るくしたい』って言ってたよ。あの頃

『感動の条件』より

■生んでくれてありがとう

弟の幸士がどうしても店を出すことにこだわったのはもう一つ理由があった。物件が見つかる少し前、僕と弟を一番かわいがってくれた祖母が亡くなった。

通夜の日、夜とぎの時、僕と幸士は棺桶にあごをくっつけて、死んだ祖母の顔を見ながらぼーっとしていた。すると、幸士がボソッとこう言った。

「兄ちゃん、ばあちゃんが最後に『はい、ありがとう』って言った」

「俺、感謝でいっばいの店を作りたい。絶対がんばるから俺にやらせてもらえないかな？」

本人の了解を得て書かせてもらうが、とにかく幸士はやんちゃ坊主で機嫌が悪かったら周りに当たり散らしてどこかにいなくなるような男だった。なので、正直その時は、全くと言っていいほど任せる気はなかった。しかし、彼の努力は本物だった。オープン前日、僕たちは日頃の感謝の気持ちを込めて、スタッフたちの両親を招待して、最後に一人ずつ感謝の気持ちを言うこと決まった。

その会の名前は、「生んでくれてありがとう祭り」

リハーサルでみんな恥ずかしそうに手紙を読む練習をしていたが、実際両親を目の前に感謝の言葉を言い始めると、全員号泣。

最後の方になり、幸士の順番に。彼が一番泣いていた。その日の幸士から両親への感謝のメッセージ…。

正直、俺はちょっと前まで、親に対して生んでくれてありがとう、育ててくれてありがとう、そんなこと思ったことがありませんでした。

当然、感謝の言葉なんて言ったことがありませんでした。

でも俺自身がちあきと結婚して、子供が生まれて自分を守るものができた時、初めて親のありがたみってこのを知りました。

このありがたみって言葉は俺に最後に植え付けてくれたのが、この間死んだばあちゃんです。

ばあちゃんが死ぬ前の日、俺と娘のはるなが病室に行っていた時、はるなが「ばあちゃんまた来るね」って言った。ばあちゃんが意識もうろうとしながら、「はい、ありがとう」

そう言うてくれました。それが、ばあちゃんの最後の言葉でした。

この店ができて、俺が店長として仕事をさせてもらえらることになって、本当にばあちゃんが残してくれた「ありがとう」って言葉をたくさんの人に伝えさせてもらいます。

こうやって今があるのも、こうやって働けるのも、そしてこの地に立っているのも、父さん、母さんが育ててくれたおかげです。二人なくして今の俺はありませぬ。

この姿を、本当に本当に天国にいるばあちゃんに見せたかったです。

気づいた時にはもういなかった。でもばあちゃんが最期に残してくれた言葉を伝えていけるような男になるために、俺ががんばります。

父さん、母さん。俺を生んでくれて育ててくれてありがとう。命をつないでくれてありがとう。俺は父さんのこと、男として尊敬しています。

これからもよろしくお願いします。

俺を生んでくれて本当にありがとうございました。

2007年6月26日

永松幸士

この日を境に問題児だったかつての幸士は消え、まったく違う人間になった。そこにいた人間がみんな、自分が何のために、そして誰のために仕事をして

いくのかという軸が座った。そしてこの宣言をした日から、入れ替わりの激しかった社員は誰一人として辞めなくなった。今も全員元気に働いている。

■Jの意志

どの国にも歴史に名を残した人だけではなく、国やふるさと、そして自分たちの子孫を思い、がんばってくれた人たちがいる。

当然、日本にもそういう誇るべき人はたくさんいる。歴史をさかのぼり、幕末、明治、大正、そして昭和、戦後、今の日本を作り上げた、僕たちに命をつないでくれた人たちが、がんばってくれた誇るべき日本人たちのことを、僕は勝手に「J」と呼んでいる。

あなたにもいると思う。それはあなたのおじいちゃん、おばあちゃん、その前の人たち、あなたの未来を最後まで心配して命を終えたご先祖様、もしかしたら親戚のおじさんだったり、ある人にとってはかわいがってくれた恩師だったり、近所のおばあちゃんだったりするかもしれない。

肉体は滅びても、意志だけは続いていく。その意志は目に見えない「たすき」となっています。そこにはあなたが見守り続けてくれている。僕にとつての「J」の中

には、一人の友人がいる。彼の名前は、田畑修治という。小学生でたこ焼き屋になると決めた僕の夢を初めて理解し、そして大きくなったら二人で店を開こうと約束し、二人でたこ焼き修行をした。

僕がたこ焼きの本来本元の大阪ではなく、東京に上京したのは修治が言うてくれた一言からだ。

「シゲちゃん、東京にはすごい人がたくさんいるらしいから、そこでたくさんの人と出会って、いろんなことを勉強してからたこ焼き屋になろう。俺、シゲちゃんが帰ってくるまで金貯めて待つとくから。その方がいいような気がする」

こんな雲をつかむような無謀な計画だけで、僕は進路を東京に決めた。

しかし、僕が上京する前の年、僕たちが愛してやまない地元祭りの初日を終え、当時まだ幼かった僕の弟や、その友人であるサトシと一緒に祭りの片付けをした後、修治は持病の心臓病が突然悪化し、仲間の家で亡くなった。

僕自身の「J」の中には

修治がいる。修治のことを思うと少々のは乗りに越えて行けるような気がしてくる。僕の中で彼は大きな力になってくれている。僕たちは毎日、自分たちが今の姿を誰に見せたいの

かをイメージしてから仕事に入ると書かせていた。その中には今生きている人はもちろんだが、個人にとつての「J」、それはおばあちゃんでも誰でもいい。その人が自分の姿を見て、喜んでくれているのかどうかをイメージしてみてほしい。

「あなたは今幸せかい？」

そう聞かれたらあなたはどうか答えますか？

編集後記

母の観察日記、五行歌。

がんばれあたし！

心の中で

叫んでやった

だって今日から

小学生のママだもの

いつの時代も子育ては未熟な大人が未熟な子を育てながら、共に成長していくものである。「いい子」に育つかどうかは分からないが、親が日々幸せを感じてさえいれば、少なくとも「幸せな子」には育つに違いない。(日本講演新聞2017年6月5日号社説より)

実は2011年10月6日、上記書籍「感動の条件」出版記念の東京初講演会にて、誰の講演とも知らず勝手に誘われ参加してシゲちゃんに有難く出会っている。知人と真ん中の前の方に座ったが、隣りが何と、その後あの筆文字を学ぶことになる初「しもやん」(下川浩二さん)！

こうした出会い、いわゆる引き寄せの縁が、以来立て続けにあったが、それは同じベクトルを向いている人たちが必然的に出会うことと有難く理解している。

その思いは、シゲちゃんが母から学び、実践している、「FOXYOU精神」。

斉藤一人さん、和田裕美さん、西田文郎さん、白駒妃登美さん、ひすいこたろうさん、鈴木七沖さん、高橋恵さん、目の前のあなたを笑顔にと行動する教えの他たくさんのご縁の皆様感謝は尽きない。志事の恩師、共に歩んできた仲間たち…。皆、自分にとっての「J」である。そして亡き祖母、父、生後すぐ逝った双子の弟…。身近な大切な「J」。「恩送り」を使命として、目の前のご縁の人をただ笑顔にする、「おせっか愛」活動をさらに励み、徳を積んでいきたい。

新潟・魚沼の施設で一人暮らしする認知症の母。その笑顔が見たい。2年ぶりに。